

優秀賞  
ゆうしゅうしょう

高校生区分  
こうこうせいくぶん

優しい社会を築くため  
やさしいしゃかいをきずくため

沖縄県立小禄高等学校 三年  
おきなわけんりつおろくこうとうがっこう さんねん

城戸 虹玖  
きと しずく

「怖かった」私の友達は障害者に対してそう言った。私はいつも心優しい友達が言ったという事実にはショックを受け、とても悲しい気持ちになった。

それは、私達がモノレールに乗っていた時のことだった。私達の前に二十代くらいの男性が一人座っていた。男性は明らかに周りの乗客と違って、座りながらもずっと動き続けていたのが目に付いた。そこで、私はすぐにこの男性がおそらく何か

しらの発達障害を持つ者ではないかと推測した。また、その多動性からADHDだと考えることもできた。そのため、私は彼が障害者だからと割り切り、彼が何をしても一度も怖いと感じなかつた。

しばらくすると、彼は私達に握手を求めてきた。突然のことだったので少し驚いたが、私達はそれに応じた。それから彼も私達に心を許したのか、立て続けに絡むようになった。まず、彼が持っていた古い写真を何回も見せてきた。その後、車内に流れるBGMを大きな声で歌ったりしていた。彼はまるで本当の子供のようにはしゃいでいた。この行動を見て、彼が発達障害者だという私の推測は確信に変わった。その時から既に友達は彼を異常者として扱っていただろう。

すると、彼は友達に声をかけ、「その服かわいいね」と言った。

友達ともだちは微笑ほほえみながら会釈えしゃくしていたが、その後の表情ひょうじょうは強張こわばっていた。その時とき、私わたしは障害者しょうがいしゃだと言いっても一応赤の他人いちおうあか たにんなのだからしょうがないことだとはわかっていた。

それから、彼かれはモノレールの中なかでずっと落ち着おきのないまま過すごしていた。そうしているうちに、私達わたしたちの降りる駅えきに着ついた。彼は私達かれ わたしたちに「バイバイ」と言いって手てを振ふったので、私達も手てを振ふり返かえしてモノレールを後あとにした。

その後ちよくこ、友達ともだちは「怖こわかった」と言いったのだ。そこで、私わたしは「あの人は多分障害者ひと たぶんしょうがいしゃだから受け入れてあげよう」と言いった。

しかし、友達ともだちは「え、障害者しょうがいしゃ？」と困惑こんわくし、その言葉ことばは口くちにするべきではないと言いった様子ようすだった。友達ともだちはただの頭あたまのおかしな人ひとと思おもったのだろう。その様子ようすに私わたしはとても違和感い わかんを感じかんじた。きっと、こう言いった経験けいけんをしたことがある人ひとは少すくなくないは

ずだ。それに、差別さべつはしたくないと思おもっているが、やはり怖こわい対象たいしょうと感じかんてしまう人ひともいるだろう。では、なぜ障害者しょうがいしゃのこを怖こわいと思おもってしまうのだろうか。

私わたしは友達ともだちを通して、障害者しょうがいしゃについて無知な人がいるという事じ実に目めを向むけた。一目ひとめでわかる身体しんたいの障害しょうがいだけでなく、一見いっけんするとわかりにくい精神せいしんの障害しょうがいもあることを知らない人ひともいる。障害者しょうがいしゃを障害者しょうがいしゃだと認識にんしきして理解りかいするということとはとても重要じゅうようなのだ。そうすることで、私達わたしたちは障害しょうがいというものを受うけ入れる余裕よゆうを持つことができる。

しかし、勘違いかんちがいしないで欲しい部分ぶぶんがある。それは、障害者しょうがいしゃを健常者けんじょうしゃと差別的さべつてきに見みていることとは全まったく違ちがうのである。

両者りょうしゃが違ちがう性質せいしつを持っていることは明らかあきかな事実じじつであるからこそ、その不自由ふじゆうな部分ぶぶんを補おぎなおうという意志いしが大事だいじなのだ。特とく

に現代では、今まで障害がないと思っていた人も実は障害者だったという事例も多くみられ、障害者のいる社会が当たり前にもなってきた。それに対応するためにも、障害者について様々な理解を持つべきではないだろうか。

そして、健常者の心の内には差別的な要素を含んだ部分が潜んでいる。それは、障害者を「かわいそう」「大変そう」「気の毒だ」と考え、哀れみの目で見てしまうことである。差別をしないように、「助けてあげよう」などと保護の対象として捉えることは上から目線になってしまう。健常者から特別に扱ってほしいと考える障害者は少ないだろう。むしろ、障害に対する不自由はないと主張する人もいるくらいである。その観点からみると、私達は差別について考えすぎてしまいい、かえって彼らに不快を与えていることもあるのだ。

私達がするべきことは、障害者も健常者も同じように生活できる社会を作っていくことだ。彼らの中には自立して生きる練習をしている人もいる。親が亡くなってしまった時のため、社会の中での自分の存在意義を見つけたためなど、理由は様々だ。共生社会を実現するには、私達が障害者の自立支援を行うべきであるのに、彼らが話しかけてきても無視したり、怖いからといって彼らの存在を遠ざけてしまうと、いつまで経っても関係は変わらないままになる。それを解決するにはどうしたらいいだろうか。

ノーマライゼーションという考え方が、障害のある者となない者が平等に生活を営むことは正常な状態であり、障害者をノーマルにするのではなく、周りが変わっていくという意味を持ち合わせている。また、両者が協働して社会参加

するための助けにもなる。ノーマライゼーション思想の普及を  
することで障害による溝をなくし、差別を生まない、より良い  
共生社会を築くことができる。

ほんの小さなことからでも、社会全体で動いてみよう。きつ  
と大きく変わるだろう。